

ローベルト・ムージルの小説 『特性のない男』より

中川 勇 治

はじめに

永年、小樽商科大学でドイツ文学を講じながら、私はローベルト・ムージルについて本格的に論じたことは一度もなかった。たしかにこの作家を研究対象として、長い間その著作に親しんできたことは事実で、私なりの理解も知識も若干は蓄積された。しかし、それを講義の場に持ち込むことには、いささか、ためらいがあった。だが「悠々自適」の日々を送る身になり、生臭い我執も消え去ってしまうと、あらためて学生諸君と共にムージル文学の魅力について語り合いたいと思うようになってきた。今回、『人文研究』誌の御厚意により、その願いがかなうことになった。以下の一文、御笑覧のほどを。

ムージルの受容

オーストリアの作家ローベルト・ムージルは、二十世紀がまさに終ろうとする現在、ようやくその偉業にふさわしい評価が与えられ、ドイツ語文学の範囲を越え、広くヨーロッパ文学全体から見ても、巨匠としての地位を確保したように思われる。

ミラン・クンデラが1983年にアメリカで行なった講演『貶められたセルバンテスの遺産』は、今世紀の中部ヨーロッパで達成された偉大な文学的成果の担い手として、カフカ、ムージル、プロッホ、ヤロスラフ・ハシェクの四人の作家を挙げている。クンデラはセルバンテス以来のヨーロッパ小説の発展を歴史的に概観しながら、ムージルとプロッホが思想を小説形成の重要な要素として取り入れた意義について次のような説明をする。「それは小説を哲

学に変容させるためではなく、小説による物語り部分を基盤としながら、合理的・非合理的手段、叙述や冥想の手段を駆使し、人間存在にあらゆる角度から照明を浴びせ、小説をして最高の知的合成物たらしめようとする企てであった¹⁸。この説明は、ムージルの未完の小説『特性のない男』の本質を的確にとらえたものとして記憶に値いする。さらに今日、一般に行なわれている見解によれば、『特性のない男』は、マルセル・ブルーストの『失われた時を求めて』、ジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』と肩を並べて、今世紀におけるヨーロッパ・モダニズムの基本的テキストに数えられている。人間の情念を軸として展開する事件の叙述、言い換えれば、物語の進行によるよりも、思想の生成、発展の過程をエッセイの形で捕捉しようとする新しい小説構成法が、そうした判断の根拠になっているのであろう。

またドイツ語圏でのムージル受容は、1952年の「再発見」以来まことに目覚ましいものがあり、読者は一部の好事家に限定されず、知識人層全体に及んでいるようだ。廉価なペーパーバック版の作品集が出たり、ムージルの処女作『生徒テルレスの錯乱』が映画化されて好評を博したり、戯曲作品も実際に上演されるなど、そもそも作家ムージルにほとんど縁のなかった若い世代まで好奇心を掻き立てられる有様だった。またムージルの学問的研究も盛んで、毎年少なからぬ人々が学位を取得し、研究成果の出版も途絶えることがない。ウィーンやクラゲンフルトなどムージルゆかりの地には資料、文献を備えた文書館の施設があるし、ザール州立大学には「ローベルト・ムージル研究施設」が併設されている。また、研究者のみならず、一般のムージル愛読者をも含めた「国際ローベルト・ムージル学会」が、1974年にオーストリア政府援助の下に設立され、機関誌の発行、研究発表やシンポジウム、それに展示会の開催など今日まで活動を続けている。これを要するに、ドイツ語圏のムージル受容は理想的な状態にあるといえよう。

「特性のない男」とは

さて、以上に述べたムージルの評価や受容は、ひとえに小説『特性のない

男』に基づくもので、『生徒テルレスの錯乱』を始めとする他の諸作品は、文学者ムージルを理解し判断するための根拠とはなったものの、結局は主著を生み出す準備段階に過ぎなかった。すでに1905年10月の日記に『特性のない男』の構想が記されており、作者の関心が終生この小説にあったことを裏書きしている。

ところで、今やムージルの名と結びついて離れることのなくなった「特性のない男」(Der Mann ohne Eigenschaften, 英訳では, The Man Without Qualities) とは、いったいどんな存在なのか。また作者自身は、いかなる発想からこの作中人物を登場させ、いかなる役割を演じさせようとしたのか。

英国のムージル研究者フィリップ・ペインに依ると、ムージルはこの小説が全体として均衡のとれた構造を持つようにと心掛けたらしい。今日、推測できるところでは、作品全体は四部分より成り立つ予定だった。すなわち、

第一部 『一種の前置き』(全19章, 完成)

第二部 『似たことの繰返し』(全104章, 完成)

第三部 『千年王国めざして』(「犯罪者たち」)(38章のみ完成, 約60章ほど完成が見込まれていた)

第四部 『一種の終わり』(題名は推測, 一章も書かれず。分量は第一部と同じくらい。ウルリヒという名の主人公の「最後の声明」も含まれるはずであった)。

以上の見出し標題から、ほぼ次のような構想が浮かび上がる。第一部はウルリヒと「カカーニェン」国(第一次世界大戦直前のオーストリア・ハンガリー帝国を指す)を導入することが主眼となる。次いで第二部は、ウルリヒが「平行運動」と呼ばれる民意結集キャンペーンに傍観的に参加し、ウィーン上流階級の実態を詳しく観察し、社会の現実と接触する機会が与えられる場となる。第三部は、僅か38章しか完成していないので、遺稿や草案から推測せざるをえないが、ウルリヒと妹アガーテとの恋愛が中心をなし、愛の奇蹟を求めての実験が行なわれ、結局失敗し、主人公の人生観や生き方に決定的な変化が生ずるまでを描く。第四部は、おそらく一種の貸借対照表を提示

するはずで、第一次世界大戦が勃発した後、ウルリヒがたどる人生とカーニエン国の運命を含めて、あらためて小説全体の結論が示されたのではなからうか。

以上のような全体構想を考えるならば、少なくとも、第一部のウルリヒの紹介部分は「特性のない男」がどのようにして生まれたか、また、それが作品中でどのような機能をもつ存在かという疑問を解明してくれるであろう。ただし、ウルリヒが第二部では冷静無感動な態度に終始し、まったく受動的な存在にとどまるのに、第三部でのアガーテとの愛の幸福追求の実験では、別人のような精力的存在と化す。従って、第三部でのウルリヒは、第一部で設定された「特性のない男」という条件を擲った状態にあるのかもしれない。

小説第一部

全19章から成り立つ小説の導入部『一種の前置き』は、まことに奇妙な、しかし作品の理解には必要な第一章『奇妙なことに何一つ起こらない話』を除くと、直接、間接に主人公ウルリヒの紹介にあてられている。全体は、ウルリヒ・フォン某なる32歳の高等遊民が、語り手の口を通して、自らの人生を振り返り、いかにして「特性のない男」となるにいたったかを報告する部分、それと話の中の現在にあって、ほとんどの時間をゆきずりの恋、あるいは情事にかまけて過ごすウルリヒの自堕落な生活を描く部分から成り立っていて、いわば立体的な人物像が提示される。

まず第二章では、ウィーン市の郊外に建てられた古い貴族の別荘が、実は、「特性のない男」の住居であると知らされるが、それ以上の詳しい説明がない。せいぜい、その邸の主人が経済的に恵まれた、学究の雰囲気を漂わす無職の壮年の男らしいと推測できるだけである。『特性のない男にも特性のある父親はいるものだ』と題する次の章に入って、ようやく話は進展する。「特性のない男」の父は、元来、裕福ではあるが市民階級の出身で、永年にわたる勤勉な努力がみのり、現在では大学教授であり、オーストリア法曹界の泰斗として広く社会の信望を集めている。多年にわたる国家への貢献、滅私奉公によ

り、皇帝から世襲貴族の位階を授けられ（それ故、息子もウルリヒ・フォン某と称するのである）、国会議員にも任ぜられている。彼は若い学徒の頃、貴族の家々に出入りして家庭教師を勤め、大いに信頼されたが、その後、斯界で成功してからも、彼らと親密な交際を続け、よき関係を維持してきた。そのためもあって、彼は帝国内の大貴族のほとんどの家庭で顧問弁護士あるいは法律顧問の役を果たし、毎年、高額報酬も得るという恵まれた環境にあった。貴族層に対する忠誠心は衰えることがなかったが、議会活動においては、彼は常に市民派に所属し、その利益を擁護した。貴族の側もそれを異とせず、彼に対してなら含むところがなかった。かりに彼が貴族の側に与したとしたら、後者はそれを一種の権威冒瀆と見なしたことであろう。それほど生来の身分の違いは、この国の伝統的な雰囲気の中では決定的であり、不可侵なものであった。この父の眼から見ると、息子のウルリヒが、小さく古びたとはいえ、曾て貴族の館であった建物を自分の住居とすることは、権威に対する許しがたい反抗であり、下剋上の振舞であった。それはまた同時に、父が自分の存在の根拠として全面的に信奉し、献身してきた権威に対する重大な反逆でもあったのだ。一方、息子の側から見ると、父は自らの努力、自らの実力によって知性、精神の世界の貴族（Geistesadel）になった人である。それなのに、純血種の馬を飼っていたり、広大な土地や財産を所有していたり、先祖代々の、一見由緒ありげな仕来りや伝統的行事に憂き身をやつす世俗の貴族たち（Geburtsadel）に対して、いったい何故、膝をまげ腰をかがめて御機嫌取りをするのか。このように、息子には息子なりに父に対する不満があり、依然として世の中に残っている時代錯誤的な身分意識への反抗があったのだ。ところが、父が貴族階級に抱く尊敬の念は生得のものであって、なんらルサンチマンは含まれていない。この度の息子の思い上がった振舞は、父が生涯かけて護ってきた生活の根本感情をひどく傷つけ、侮辱したのであった。だがこれを時代の変遷による父と子の確執であると簡単に片付けるわけにはゆかぬ。父が、いわゆる卑屈な奴隷根性（Untertanengeist）から貴族階級に阿っているわけではなく、自ら受け入れた生き方の根本条件として貴族

という権威を尊重しているのであるから、これは、彼が一個の存在として世界全体に相対する場合の現実認識を示すことになる。貴族制社会が自分の眼前にある不動の現実であって、その変革など夢想だにせず、無抵抗に受け入れることが唯一可能な生きる道と判断したのである。この現実受け入れのやり方は、次章の比喩の中に鮮明に現われる。すなわち、

Wenn man gut durch geöffnete Türen kommen will, muß man die Tatsache achten, daß sie einen festen Rahmen haben.

(開いた戸口から入ってゆこうとすれば、当然、戸口には頑丈な框があるという事実を尊重しなければならない)。しかも、これこそウルリヒの父である老教授がこれまでずっと遵守してきた人生の原則であり、要するに、現実感覚(Wirklichkeitssinn)の要求であると説明される。この比喩が妥当か否かは別として、普通私たち人間は、ものごとの対処にあたって、少なくとも自分の五感を働かせ、知覚した印象を組み合わせ、場合によっては思惟の力で推測して、その場の具体的状況に応じて適切と思える行動をとる。これを現実に即した感覚の働きと見れば、「現実感覚」なるものが実在することはまちがいない。そうすると、この感覚に対応するものとして、まだ現実化はしていないが、あるいは現実となるかもしれない物事を察知する感覚があるに違いない、つまり、可能性を捕捉する感覚(Möglichkeitssinn)があるに違いないと話が展開してゆく。ここで注釈めいた言い方をすると、可能性は現実の反対概念ではない。ドイツ語で「現実」、「可能性」の反義語を見ると次のようになる。

Wirklichkeit — Utopie, Illusion

Möglichkeit — Unmöglichkeit

つまり、「現実」の反義語は「ユートピア、幻想」であり、「可能性」のそれは「不可能」である。従って、ここで「現実感覚」に対応する感覚が「可能性」という規定を受けるのは、Modalität(存在の様態)の考え方に基づいている。哲学では、この存在の様態が、現実、可能性、必然性に三分されるようであるが、ここでは現実に対応するものとして可能性が登場した理由が明

らかになっただけでよしとしておこう。さて、「可能性感覚」があるという前提で先へ進む。この感覚を持つ人間は「この事件が、いつ、どこで、どんな形で起こった、起こるはずだ、起こるにちがいない」という断定的発言はしない。その人間は（頭の中でまったく新しいことを考えるか、現実の逆を想像して）「あるいはひょっとすると、この事件が起こるかもしれない、起こってもまずくはない、起こる必然性がないわけでもなさそうだ」とひどく回り諄い、曖昧な言い方をするであろう。どうも日本語では表現しにくいのでここに原文とその英語訳を挙げておく。aが断定的発言、bが曖昧発言の例である。

- a) Hier ist dies oder das geschehen, wird, muß geschehen.
- b) Hier könnte, sollte, müßte geschehen.

英語訳では

- a) Here this or that happened,...will happen, must happen
- b) Here this or that might, could or ought to happen.

この例で、aは現実感覚の表現、bは可能性感覚の表現ということになる。では「可能性感覚」の説明を聞くと、ほぼこんなことになる。これは今、実際には存在していないが、現に存在しているものと全く同等の権利をもって、やがて生まれてくるかもしれないものがある。その未然の存在を頭の中で考え出し、既存の存在するものと同等に取り扱う能力を指す。この発想の背景には神による世界創造のイメージがちらついている。神はいくつかの選択肢の中から一つを取り上げ、現在の世界を創造された。神の全知全能を考えれば、神がなにか退っ引きならぬ事情に迫られて決断されるということは、そもそもありえない以上、現在の世界は別の他の世界であってもよかったのだ。つまり、現在の世界は必然性、絶対性に根拠を置く世界ではなく、あくまでも、神の任意の選択による相対的なものということになる。

従ってこの「可能性感覚」をそなえた人間は、所与 (Gegebenheiten) をあまり真剣に受け取らず、運命論者のようにあっさり諦観しない。その人間は「これはたかだか一つの例、一つのテスト・ケースではないか」という調子で

現実に対峙し、いささか所与を見下す傲慢なところさえある。

そうしたタイプの人間を「可能性人間」(Möglichkeitsmensch)と呼んでおくが、彼は、たとえば、世間が憧れ、賛美するものをまやかしと見るし、世の中で禁止されていることを自分には許されていると考える、いや、それどころか禁止も許可も一切意に介さない。とすると、この種の人間は、現実の社会の目から見ると、潜在的な犯罪者あるいは反社会的分子となるかもしれない。また、現実感覚からすれば、かかる不可思議な人々は空想、夢に耽る怠け者、空論家、知ったか振り、粗捜しとされるだろう。とすると、彼らは、現在人間社会を支配している秩序、原則あるいは体制そのものを完全には信用しない連中で、その社会の枠組みを破壊しようとする革命家の一派なのか。しかし彼らには政治的意図はなく、現実には干渉せず、現段階では主として自己の内面と向き合っているにすぎない。ところで、可能な体験、可能な真理とは、現実の体験、現実の真理から現存しているという価値を減じたものとイコールではない。少なくとも、その中には高度の神性、一つの火焰、一つの飛躍、一つの建設をめざす意志、それに明瞭な意識によるユートピア信奉が含まれている。そのユートピア信奉は、現実を恐れ憚るべき対象とは考えず、むしろ克服さるべき課題、そして神の生み出した発明の一つとして取り扱う。結局のところ、地球はまだそれほど古くなったわけではなく、今ほどその持てる潜在能力を完全に開花させるのにふさわしい時期は曾てなかったと見ているのである。今、手許に10万円あるとする。その10万円には、いろいろな物を買ったり、サービスを受けたりする力がある。それはこの現実の世界での用途であり、この現実から生まれてくる可能性である。結局のところは、その用途の範囲は定まっており、誰が10万円を使っても、平均してみるとその範囲を越えないものだ。ところが、ここにある人物が登場する。彼(女)はそこにある10万円をどう使うかということには一切頭を悩まさない、いや、そもそもその金には関心がない。彼(女)は全く別なことを考えるのである。これは現実感覚と可能性感覚の違いの説明で、一方には、所与の中にもみ囚われて、その中での選択の余地(つまり、現実上

の可能性)だけを取り上げる人々が居り、他方には、所与そのものを神の決定した選択肢が現実化したものに過ぎないと見る人々が居るということである。この種の人間は現在、発生期にあり、まだ画然とした姿を見せてはいない。いったい彼らはやがて未来社会に出現するタイプを先取りしているのだろうか。これはまた、知性の、精神の世界の革命家なのであろうか。

次に「可能性人間」についての説明を追いかけると、それは、まず、「現実」と指定されているものごとに、なにかしら胡散臭いものを感じ、どうしても真剣に「現実」と取り組む気になれない人間である。そのため、いつの間にか本来、現実によって検証されるべき自分特有の性質、自分らしいと内心で納得し、肯定できる資性を感じ取れなくなってゆく。つまり「特性」が失われてゆくのである。そのような人間は今日のところまだ未完成のタイプで、確かなことは言えぬが、たとえば、なんらかの犯罪が起こっても、それは社会の悪しき欠陥の故だなどと平然として放言するかもしれない。

以上、「特性のない男」の解明にとって頗る重要な第四章を要約的に紹介したが、どうもこれだけでは納得のゆく説明ではないようだ。そこで更に歩を進めて、「特性のない男、すなわち、可能性人間」ウルリヒが、いかなる過去を経験して自らの人格を形成、あるいは逆に喪失したのかという視点から問題を追究してみよう。

少年時代からウルリヒのものの考え方は現実離れしていたらしい。その一例は、日本式に言って、高校生の頃に書いた「祖国愛、あるいは祖国崇拜」のテーマを扱った作文である。オーストリアの歴史には(少なくとも子供たちの教科書において)特殊事情があり、対外国の戦争ではかなり勝利した(ことになっている)が、ほとんどの場合、その相手国に対してなんらかの譲歩が必要であった。つまり、オーストリアは名目上こそ敗戦しなかったが、実質的には相手国に屈伏していたことになる。

ウルリヒはその作文の中で、「真剣に祖国を愛する者は、祖国がすべての国々の中で最高だなどと思うべきではない……」とか、「神は御自分がお造りになられた今の世界のことは、従属法を使って語るのがもっとも妥当だとお

考えのことでありましょう。といたしますのは、神は世界をお造りになるのが御仕事ですが、その御仕事のとき、これとは違う世界を造ってもなら変わりはないなとお考えになっておられるからであります」と書いたのである。このため学校中で大変な物議をかもし、反逆罪や神の冒瀆などの疑い濃厚で退学寸前に追い込まれ、驚いた父親の介入で、ベルギーの田舎にある「落ちこぼれ生徒」収容の学校へ送られる。ここで他人の抱く理想を嘲笑、軽蔑しがちな彼の考え方が、さらに国際的な磨きをかけられたのである。

ウルリヒは青春の修業時代に、子供の時から漠然と感じていた「大人物になりたい」という夢を実現すべく、三つの分野を次々と渡り歩きながら、自らの能力を試したことがある。彼は残念ながら、軍人、技術者、数学者といういずれの職業にも献身できず、途中で放棄した。その間の事情は、個人的な色合いが濃いだけに、彼が特性を失うにいたった深い原因を示唆するかもしれぬ。そこで、ウルリヒが32歳になった時点での回顧をやや詳しく検討する。ウルリヒが振り返ってみると、「大人物」(ein bedeutender Mensch)になりたいという願望はそれまでの生涯をずっと支配してきたように思える。その大きな企てが、結局、成功しなかった致命的な原因、あるいは事情は、彼自身が「大人物」になる方法、また「大人物」とは何かという肝心なことを知らなかった点にある。小学生の頃、ナポレオンがヨーロッパをひっくり返そうとした大悪人で、横暴な専制君主になったと歴史の授業で聴き、その犯罪性に惹かれたためか、彼を「大人物」のお手本と思い込んだ。そのため彼の最初の試みは、軍人になって早く昇進し、ナポレオン同様の専制君主になって勢威を振りたいと願って騎兵隊に見習士官として入隊することだった。しかし、彼の連隊長はウルリヒがそのように素晴らしい能力を秘めた軍人とは見なかった。それでも、ウルリヒが過度の野心家でなかったとしたら、この稼業をやめることもなかったであろう。とにかく、軍人であっても平時の訓練場では、本人が思い上がって(誤って)この場にいるのか、それとも天職として騎兵になったのかは、はっきり区別しがたいことである。ウルリヒはまだナポレオン流の英雄的君主のイメージに酔い痴れて、騎兵隊生活に満

足していた。その当時、彼の目から見れば、人間は将校、女性、地方人の三分類しかなく、特に地方人なる部類は、体格の悪い、知的には劣った男たちのことで、将校たちに自分の妻や娘を取り上げられる宿命をもっていた。また軍人という職業は、ウルリヒの見解では、壮大なペシミズムへの献身を使命とし、切れ味鋭く、灼熱のごとき器具であって、世界の幸福のためにはこの器具が世界を切り裂き、焼き尽くすことになるはずであった。しかしこの得手勝手な思い上がりがち砕かれる日が来た。ウルリヒはある女性とトラブルを起こした。女性の父が財界の大物で、娘の一件を陸軍大臣に訴えたため、ウルリヒは連隊長の大佐に叱責を受けた。その後、世界中を揺り動かす大冒険の英雄になろうと勇んでいた気持がペシャンコになり、夢がさめた。ウルリヒの心の目には、英雄どころか、誰もいない広い練兵場で、独りで酔っ払って騒いでいる若者の姿が映っただけであった。どれほど怒鳴って騒ぎたてても応えるものは練兵場の小石ばかり。これを悟った彼は、少尉になったばかりで軍人稼業をやめ、兵役を退いた。これが第一回の試みの顛末である。

騎兵隊をやめたウルリヒは工学技術の分野に移ったが、結果は、生きた動物の馬から全身が金属製の機械の馬に乗り移ったのと同じことだった。人々は機械文明の恩恵に浴しはじめていたし、技術革新は時代の趨勢であり、技師の胸のポケットにさし込まれた計算尺は、世界の諸問題をあっという間に解決する魔法の手段と思われるほどであった。たとえば、彼は計算尺を胸のポケットにさし込み、心臓の上にその固い白色の線を感じておれば、誰かが深刻そうな面持ちでやって来て、大袈裟な意見とか、海より深い愛情などについて論じ始めても、すかさずそれを遮って、「少々お待ち下さい。まず御説全体の誤差の範囲と内容の確率的価値を計算してみますから」と軽く往なすことになる。つまり、その工業技術の世界を支配する論理や合理主義は、人間のあり方を根本から変革する圧倒的な力を持っている。ところが、技師たちを見ていると、自分の職業に打ち込んで、他のことは顧みない。彼らの作り出す、あるいは考案する機械は全世界を支配しつつあるが、その斬新な技術の精神を彼ら自身の生活に適用しようとはしない。生活と仕事は画然と分

離しており、仕事の話が家庭へ持ち込んだりすることは、まったくとんでもないことと忌避される。ウルリヒは、この分野で大人物になろうとする望みを捨て、いよいよ最後のもっとも重大な試みに乗り出すことにする。

三度目の試みは、既に経験した工学技術の理論的源泉をなす数学の分野でなされ、ウルリヒはこれまでに例のないほど、真剣かつ勤勉に研究に没頭する。

数学の世界には、工業技術の進展を支えた合理主義の原点ともいえる新しい思考法そのもの、あるいは、精神自体が存する。すなわち、その当時起こりつつあった途方もない人間社会の大改造の根源となるもの、いや起源をなしたものが潜んでいた。数学こそ今日の大変化を生み出した思考法なのである。今や人類の古い昔からの夢が次々と実現しつつあるが、それは専ら数学の発想法に依る。曾て人々が抱いた夢のような憧れは数多いが、次のような例が挙げられよう。鳥のように飛ぶこと、魚のように大洋を旅すること、大山岳や大山塊の下に穴を掘って潜り抜けること、神のような速さで報せを送ること、肉眼では見えない遠方のものを目で見、その音を耳で聴くこと、死者の語る言葉を耳に聞くこと、奇蹟をもたらす治療睡眠に身をゆだねること、自分の死後20年たった時の世界を生きているうちに眼で見ること、星の煌く夜にこれまで誰一人知らなかった世界中の種々を知ること。つまり、昔から人類の抱いた夢が、光熱、エネルギー、享楽、快適さであったとすれば、今日の研究は科学であるばかりか、魔法の一種であり、神が身にまとう外套の襞を開かれながら次々と未知の秘密を示される時、それを有難く押し頂く心と智能の儀式となる。

それは一つの宗教であり、その教義を買ぬき担っている数学の論理は、厳しく勇ましく、ダイナミックな刃のように冷たく鋭い。

人類の昔からの夢が（数学者以外の人々の意見では）予想とは全く違う形で一時に実現してしまっただが、同時に夢はなくなった。多言を要さずとも、数学がデーモンのように人間生活の全ての実践領域に乗り込んでしまったことは明白である。今ここに、人間の魂については専門家ということになって

いる人々（たとえば、聖職者、歴史家、芸術家など）が現われて証言する。すなわち、自分たちは数学によって破滅した。また数学は人間を地球の主人公にまで仕立てあげる働きをするが、同時に人間を機械の奴隷に変えてしまう。要するに、数学はそうした状況を醸成する悪しき知性の源なのだ。

さらにまた魂の専門家たちは報告する。すなわち、人間精神の内部は涸渇していること、個別的な問題については驚くほど敏捷に反応するが、全体の問題については無関心をきめこむという人間精神の呆れかえった裏表、細事拘泥の砂漠に投げ出された人間存在、そうした人間の落着きのなさ、悪意、比較を絶する徹底的な心の冷たさ、金銭欲、冷酷な暴力性向。これら今の時代の特徴をなすものは、魂の専門家たちによれば、専ら、強力に論理を押し通す思考が、人間の魂に加えた損傷の跡なのだ。

このように数学に悪評が浴びせかけられた頃、ウルリヒは数学者になっていた。すでにその頃、ヨーロッパ文化の崩壊を予言する人々がいて、その原因は、人間の内面に信心、愛情、素直さ、善意が住みつかなくなったからだと言っていた。そんな主張をする連中は、若い生徒や学生であった頃、数学ができなかった者たちだ、とウルリヒは内心で反撥していた。さらに時代が進むと、彼らの主張に都合よく、精密な自然科学の母にして、工業技術の祖母にあたる数学こそ、毒ガスを製造し、戦闘機を飛ばせる精神の実の母だと論ぜられた。しかし、このような危険を知らずに過していたのは、本来のところ数学者自身、それにその弟子の自然科学研究者たちだけであった。

ところで、ウルリヒが数学を好んだ理由は元来、数学は我慢ならぬという人々の故であり、彼がこの科学に打ち込んだ原因は、学問的興味よりは人間の興味であったと言える。

しかし科学の発展は絶えざる変化があり、失敗から成功へと変転することもあり、変革に次ぐ変革が生ずる。まるでメルヒェンの世界のように、科学の世界は遅しく、強く、悠々と動く。ウルリヒ自身は、人間たちに新しい（この科学の発想法に基づいた）考え方を教えてやれるなら、彼らの生き方も別なものになるはずだと考え、その可能性を模索している。いったい人間の作っ

ている世界は、いつも引っ繰り返さなければならないのか、既製秩序はいつも顛覆される必要があるのだろうか。人間という存在は、一生の間で、青年期には引っ繰り返しに賛成するものである。だから、年上の連中が現行の秩序に執着し、物事を考えるのに頭脳を使わず、一片の肉きれにすぎぬ「ハート」をもってするなどは片腹痛いと嘲笑し、反撥する。ところで若いうちに気付くことは、老人たちが倫理面で愚行をやらかすのは、知的な愚行の場合と同じことで、新しく物事の組み合わせをやる能力が欠けているためである。一方、若い人間のモラルとは、業績というモラル、つまりヒロイズム、変化というモラルである。ところが、この若い人々がいよいよ自分たちの理想を実現する年輩になると、もうそのことを覚えていないか、そんなことは忘れたがるようになっていくかのどちらかである。従って数学または自然科学を自分の職業としている人でも、ウルリヒが科学を自分の専門として選んだ時の動機は、科学を濫用するもの、誤用するものとしか感じないのである。

さて次はウルリヒがこの三度目の試みを放棄する経緯である。

彼は三度目に選んだ数学研究でなかなか立派な業績を挙げていた。但し、この学問領域でも人間同志の地位争い、有利なポジションをめぐる競争は他の分野と全く変わりなく、やはり、多少とも年功序列的傾向があり、彼の才幹が直ちに専門分野の王座をもたらずはなかつた。彼は有望な新進気鋭の学究と見られていたが、ただそれだけであった。彼には学界遊泳術に憂き身をやつすつもりはなかつた。その意欲も必要もなかつた。従って人々は、彼が若い者特有の権威打倒に燃える反逆児と見ていた。結局、ウルリヒはいつまでも、世にいうところの「有望な新人」のままであった。この「有望な新人」とは、精神の共和国では共和主義者のことを言うのであり、さらにパラフレズすれば、自分の研究には全力を傾注しても構わぬのだといった妄想を持ち、自分の持つエネルギーの大部分を外面の進歩（すなわち、出世）のために用いることをしない連中のことであった。彼らが忘れていないことは、個人の達成できる成果は僅かなものであるが、反面、職業上の昇進はそれこそ万人の願望となっていること、従って立身出世のために努力するという社

会の義務を等閑にするのである。この義務を果たすには、まず自らが立身出世主義者になることから始めねばならない。そうしてこそ、自分が功成り名遂げた暁には、他の人々が彼らの恩顧を頼りにし、支えにしてよじのぼってくる存在となるのである。

ある日ウルリヒにはわかにかこの有望新人であり続けようとする意志を失ってしまう。その理由は、世の中では人間に対する評価が優れた競走馬に対する評価といささかも変わらぬことをはっきり見て取ったからである。(してみると、ウルリヒはやはり一種のロマンティックな人間中心思想、それも精神的な高邁や、偉大さを他のなによりも高いと信じ込んでいたようである)。つまり、ウルリヒがその日に読んだ新聞記事に“das geniale Rennpferd” (天才的競走馬) なる言葉が出ていたのである。あの若き日、騎兵隊の馬から逃げて大人物になる道を変転しつつ、ようやくその努力が報われそうな仕事に携わり、自分でも納得しかかった時、再び馬が先に出て「やあ、今日は」と挨拶したのである。多少古めかしいとしても、大人の男らしさのイメージがまだ残っている時期であり、ウルリヒの驚きも理解できないわけではない。その当時、賛嘆に値する男性的精神の理想は、倫理を護る勇氣、確乎たる信条に基づいた人間としての精力、誠実さおよびあくまで道徳の道を踏みはずさない強さを備えたものと考えられていた。その理想像から見れば、

速さ (Schnelligkeit) は兎戯に類する腕白、佯撃 (Finten) は許されざること

敏捷と活撥 (Beweglichkeit und Schwung) は人間の品位にふさわしくないこと

といった評価が下されたはずである。もちろん、こうした理想像に近い人物などもはや生きている時代ではなかったから、新しい男性理想像が求められていた。たとえば、時代の寵児である科学技術の発明者が、理論的計算にあたって用いるさまざまな工夫、手練の技術、鋭敏な着想などは、厳しく鍛練をつんだ身体の戦闘技術と本質的な隔たりがないと考えられた。

今、大学者とボクシングのチャンピオンを例にとり、精神技術的に

(psychotechnisch)分析するとすれば、両者の狡猾さ、勇気、正確さ、諸要素の組み合わせ法及び反応の速度などは、おそらく同程度であろう。こういった資質は彼らの特別な成果や成功の根本にあるものであろうが、おそらく、有名な障害物競争馬とも変わるところはないであろう。あまり馬を見縊ってはいかぬ。実際、垣根一つ乗り越えるためにも、実に多くの Eigenschaften が投入されるのだから。

ところで、馬やボクシング・チャンピオンの方が大学者よりも先んじている点の一つがある。前者の偉業や重要度は非の打ち所がない測定が可能であって、彼らの中で一番優れたものは、事実、そのまま最優秀と認められることである。こういう具合に、まことに当然の理由によって、スポーツと即物性(客観性尊重の態度)が、「天才」とか「人間の偉大さ」という概念を追い出して、その後釜に座ることになった。

ところでウルリヒの研究の仕方も、時代に何年か先駆けて、このスポーツの記録向上のやり方と同じであった。彼は自らの精神が鋭敏で強健であることを実証するつもりだったし、事実、「強い者」がやる仕事を成し遂げたのである。この精神のエネルギーにおぼえる愉悦は、ある期待感、戦闘的な遊戯、未来に対しての一種の漠然とした居丈高な要求でもあった。ウルリヒには、自分がこの精神のエネルギーでもって結局、何を成し遂げることになるのかははっきりしていなかった。彼の感じでは、どんなことも出来た、世界の救済者になることも、犯罪者になることも、いずれも可能であった。

ウルリヒは科学を一種の準備、鍛練、トレーニングのようなものと見ていた。彼は多年、精神的な耐乏を愛してきた。そしてニーチェの言葉に言う「真理を手中にせんがため、魂の飢餓に苦しむ」ことの出来ない人間たちを憎悪してきた。それは、道半ばにして舞い戻る人、勇気の萎えた人、そして柔弱な人たちのことであった。彼らは自らの魂を、魂についての戯言で慰め、知性はパンの代わりに石塊を与えるなどと聞きかじっているので、魂の糧として、牛乳に浸した巻パンのように正体もなくフニャフニャしたもの、すなわち、宗教、哲学、まやかしの感情などを摂った。ウルリヒの見たところ、こ

の二十世紀は人間に関する全ての事象について探検を進めている時期であって、自らの誇りにかけて、無益な質疑はすべて「未だ時いたらず」と斥け、暫定原則に従って生活するが、意識の中では、やがて未来の人々が到達するであろう目標点を望んでいるのだ。実際、科学は厳しい冷静な精神のエネルギーという概念を発展させたのである。この概念の成立により、人類について紡ぎ出された古い形而上学や道徳論の観念は、とても耐え切れぬほど形骸化してしまった。それらの古びた観念は、いつかある日、精神の征服者なる種族が魂の肥沃な谷間に降り立つだろうと根拠のない幻想を語るのみだ。そんな幻視の世界などを放棄し、自分の周囲にのみ気を配っていたウルリヒは、ある日いつの間にか競争馬が天才になったという一文を目にすることになったのだ。彼には、今や、日常生活のルーティーンを守ることさえ無意味に思われ出した。毎朝一時間の肉体の訓練は、体に豹のしなやかさ、強靱さを与える。それは、いかなる冒険にも対処できる強さであるが、何の意味もない未来のためにはもはや役に立たない。こうした準備にふさわしいだけの冒険は決してやってこないのだ。ウルリヒは自分がまさに生命の泉から直接飲んでいると思込んでいた（すなわち、自分の研究の意義を肯定し、是認していた）時に、実はもう、自分が将来にかけていた期待のほとんどすべてを飲み尽くしていたのだ。そのため、その時まで取り組んでいた大がかりな、先の見込みのある仕事を俄に止めた。同僚たちは、まるで麻薬患者のように、この世界中に数式と実体のない関係式の幻想を覆いかぶせている。ウルリヒは言う。「まさか一生、数学者をやるつもりなんぞなかったよ」。では、どんなつもりがあったのだろうか。彼は哲学へ向かってよかったのだが、その魅力は感じなかった。

ウルリヒは、自分が若い頃感じたよりも、今は、本来なりたかったものからさらにずっと遠くへ離れたような気がする。彼は驚くほどはっきりと、自分の内部には今の時代向けの才能や性質があるのを感じ取ったが、それらを用いる可能性はなくなってしまったと思う。それに今や、サッカーの選手でも競走馬でも天才を秘めている以上、人間が自分の特殊性 (Eigenheit) を救

うために残された途は、結局その天才を活用することしかない。ウルリヒはこのような悟りを得て、一年間、人生の休暇を取り、自分の能力の活用法を探そうと決心した。

以上で『特性のない男』第一巻第一部の本文から読み取ったウルリヒ像の説明を終えるが、筆者には、正直に言って、何故ウルリヒが特性を失ったのか判然としない。少なくとも「特性のない」という限定詞を字義通りに受け取るかぎり、ウルリヒはかなり否定的な評価を受けていることになる。しかし、これまでに知り合ったこの人物は活気に溢れた積極的な学究肌の人物で、たとえば、父親のように社会的地位のある人と較べても、はるかに魅力的である。おそらく著者自身が第二部の風刺を利かせるべく用意した人物、あるいは自分の意図を読者に報せる伝声管の役割を与えた人物と言えるのではないか。第三部は刊行部分が僅かだが、そこでのウルリヒは別人のように活動的で、小説の真の主人公と化している。結局、ムージルは皮肉な形で主人公を宦官（ただし第二部の範囲にかぎられる）にしたのではないか。いずれ再考したい。

用書：“Der Mann ohne Eigenschaften”, 1.Buch. In: Robert Musil Gesamelte Werke in neun Bänden. Hrsg. v. Adolf Frisé. Rowohlt Vlg. Reinbek bei Hamburg, Mai 1978.

参考文献：Philip Payne:“Robert Musil’s ‘The Man without Qualities’ A Critical Study. Cambridge University Press, Cambridge, 1988. The Man Without Qualities. Translated by Sophie Wilkins and Burton Pike. Editorial Consultant: Burton Pike. 2 Vols. New York: Alfred A. Knopf 1995.

注：中川勇治『「セルバンテスの遺産」をめぐる——現代作家の一例——』小樽商科大学 人文研究 第 94 輯, 1997 年 8 月。147 ページ。

ローベルト・ムージル (Robert Musil)

生涯のあらまし

- 1880年 11月6日オーストリアのクラゲンフルトにおいて技師アルフレート・ムージル（後にブリュン工科大学教授となる）、その妻ヘルミーネ・ムージル（旧姓ベルガウアー）の一人息子として生まれる。カトリックの洗礼を受ける。
- 1892年—1897年 陸軍幼年学校初級・上級課程に学び、卒業する。
- 1897年 ウィーン軍事工科大学へ進学。
- 1898年—1901年 職業軍人としての将来を放棄し、父アルフレートが教鞭をとっているブリュン工科大学に入学、機械工学を専攻。
- 1901年 7月 技師国家試験に合格。
- 1902年—1903年 シュトゥットガルト工科大学で実習目的の助手になる。この頃処女作『テルレス生徒の錯乱』 („Die Verwirrungen des Zöglings Törleß“) の執筆を始める。
- 1903年—1908年 技師としての進路を放棄し、ベルリンのフリードリヒ・ヴィルヘルム大学に入学、哲学（主として論理学、実験心理学）を専攻する。
- 1906年 処女作『テルレス生徒の錯乱』を刊行。
- 1908年 論文『マッハ学説批判への寄与』により哲学博士の学位を授与される。学究として進む可能性は充分にあったが、結局それを断念し、作家となる決断をする。
- 1908年—1910年 ベルリンで著述家として活動する。
- 1911年—1914年 ウィーン工科大学図書館で実習期間を経て司書となる。

- 1911年 4月15日 マルタ・マルコヴァルディ(旧姓ハイマン)と結婚。短編集『愛の結合』 („Vereinigungen“) を出版。
- 1914年—1918年 第一次大戦で応召。最後は国民軍大尉となりイタリア戦線に参加。その他『軍隊新聞』の編集などにも従事する。
- 1917年 10月22日 父アルフレートは永年にわたる国家への貢献により貴族に列せられる。これは世襲の称号であって、息子のローベルトも今やローベルト・フォン・ムージル卿となる。 („Robert Edler von Musil“)
- 1921年 戯曲『夢想する人々』 („Die Schwärmer“) を発表。
- 1923年 上記作品によりクライスト賞を受く。
12月4日、ベルリンで戯曲『ヴィンツェンツと有名人たちの女友達』 („Winzenz und die Freundin bedeutender Männer“) が初演される。
- 1924年 1月24日 母ヘルミーネ死す。10月1日父アルフレート死す。ウィーン市芸術賞を受く。短編集『三人の女』 („Drei Frauen“) 出版。
- 1929年 『夢想する人々』がベルリンで初演。秋、ゲルハルト・ハウプトマン賞を受く。
- 1931年 『特性のない男』 („Der Mann ohne Eigenschaften“) 第一巻刊行される。大成功であったが、ムージルの経済状況はきわめて逼迫。
- 1931年—1933年 上記小説の執筆続行。
- 1933年 『特性のない男』 第二巻 第一部刊行。
この年第三帝国が成立し、ムージルはそれを嫌ってウィーンへ帰る。極度の窮乏の中で『特性のない男』の創作を続行。

- 1936年 散文集『生前の遺稿』 („Nachlaß zu Lebzeiten“) を刊行。この年ムージルは卒中の発作に襲われる。
- 1938年 ウィーンよりチューリヒへ移住。ムージルの著書はドイツとオーストリアで発禁となる。
- 1939年 ジュネーヴへ移り、きわめて苦しい経済的条件の下、また深まる孤独の中で『特性のない男』の改稿、再検討が続けられる。
- 1942年 4月15日 ローベルト・ムージル、脳卒中のためジュネーヴにおいて死去。